

詩經  
卷之十  
十

雜  
10  
十

9  
3585  
10





門	4	節
號	355	5
卷	10	

貞女列女判下目録  
 一 新井氏夫婦善行の事  
 一 慈母善行の事  
 一 春木氏乃妻善行の事

貞女列女判下目録

明治二十七年十一月五日  
 坪内松村氏寄贈

門口 9  
號 3585  
卷 10

貞女判女の判下

今れ也

一 あり平井何某と云人あり忠孝あり後書あり  
先年去冬守に仕友の時平井氏の書簡に云愚婦  
矣云れ女と云く知まり予むも云り天竺のほろ  
に山對面あり一子のものと稱し予不意におりし  
猶よ言えぬ因家あるは去り給ふに孫思不徳なり  
家時より行して知給ふと平井氏再書云先生の  
い未子先生の知と云くる字もいせ賢善なりと  
寄る人有り重ぬゆの一子善也先生れ以息善る  
時云と云くる教は仰ご一子は知しとありぬ故  
夫云れぬ知し予平井氏の書簡と云く愚蒙曾



此不徳より虚名のみを奪わすは恥て独居赤面し予  
既二年辰す武江の市店に在り時に平井氏と隣に  
在りまゝ由未年若く田舎を去らといふも人お上  
病あり申し予の幸はは縁なく病の愈し  
ひしはくくつひはあまね同夫婦の勞を仁恵  
甚厚して報ずるに於て一月くに於て困倦す對  
親のたひに人づらのおとたりたに慨感す予は  
終日泣くといふも此をわらさし一け一葉に  
て有念よまうす言ふ先生れ息より愚まは先  
生の才より心友れ交に意とくさりんをまげて  
此をすべれよわす素飯も此をたけけけひく  
心安く困倦義論ありて愚美祿ありて一飯の

憂さし此をせざれば延もあらずお言に光る  
成作ごとく予婦人の善に感づけしはけしは來より  
二年にしく平井氏老病ありて死去す病中予序は  
安否と問ふ所辛甚しといふも予ふ不念バ之を  
らく婦人の善病とんりに甚深切にしく憂若  
實に叙えよわつる腕に於て子息を養ふるとん  
て来若く慈母の年と息のひびくはよはよは先  
服たるべし然ども慈母の愛を承けんとし美子に  
らず息れ母よけりよまこと実母のくくお井氏  
卒て婦人悲歎紅淚甚しお断髪のことありり  
髪を寸紅白粉とらひ共齒と保り予に同  
云髪とらひ紅白とて信すとといふも齒と保り

不信は似たり化たり人の心の儀さゆ人といつてはなほ  
黒齒はち白化の如く一々れは美人は對する時ハ  
必終なりんけい同妾甚まどくをばもろく一と同一ハ  
ども妾乃とあらず心の不測は中ぎらん心よん  
す我の命と交むる誓を思ひまご女容儀一はははと  
いども中と一はといつて我胡の婦人齒を潔くは美人  
ならゆ多んよ何ぞす故ありとくび一とありぬれど一  
それ紙のハ太陽圓より婦人ハ隱柔の粹より陽玉に  
生きてく氣血上升より多き一病と生ト齒と換す  
ふりおが一強ハ強よ一と口熱ハと角一氣と降一  
齒の精をこくけ故一婦人齒を潔く是はたよ今  
婦人を必くくんに十人九人の常腰不足にして上外

甚一齒とてやてたくれど一とんハ上ちり  
婦人のはと潔くやまたにちりこれ紙の  
故よ或古書に云東海有婦人皆齒と黒くといは  
是既よして吾邦の礼儀とかなる故よ於上篇の  
寡とちりて貞女ちりハ皆玉齒かり田舎の婦人ハ  
白齒なりたとの寡より何ぞ必凡の礼とや  
びたとの歯は潔くも心不義なる人ハ不義なる人  
とと潔紅粉とほども貞女なる人ハ貞女なる人  
ととろに行儀とくしてん不義なる人ありや  
女よして心正しけわらん人の善ハさうらにも  
品にも見へト人見て志げく遊るらしするや

墓香に埋ひく何ぞよかづらん 貞女の心どん  
いさ地よく何ぞ卯忍よおまひ終らんや上焉の貞女  
らんよとおひ終る男中いしども孝者れぐしやこ  
くむげじさくと終るひ貞女志ごとくに死にん  
ふゆぢあうらハ儒者といはんづりおもくまんづり  
ハ布てあさうらに見らるし増て婦人の貞女とてハ  
淑く見らるしめづりきと何とよく目にさぬ  
こに後風ふもどりむら風やうげちうらにまじ  
こしてん女やむ貞女やむ人もあらずけくんは  
固にいたれく終る事とたのしみらんとうあ  
はくせんといふと後家自得す平井氏忌明て令  
トて息ぬまのち予行て認て後室を境とるん

再會の期さうん夏は又亡夫の事いひく悲  
然に予と又落涙しと悲感の深切に報じり期  
かなんやと涙絶し別離と述懐と後室亦予  
曰亡夫道をあまひ先生と慕ひて切なり愚婦女に  
てるとしとびあられも亡夫の案おに志がらむと  
終る終る忌服れ凶祭神主の法亦四季音祭のよこ  
と教へ終るをよとて一息とたは供せん予お  
記してあまひ悦びてぬすこれも又善女より寡  
かりて未年と終る故は貞烈あるはずあつても  
こごごよはあつら其志切かよして終るなるおとみ  
ず貞る守らにうたはすあらど

賛

春風樂只哲人壽

桃李花盛木尚青

既斃葉條雖莫力

藥凋隣佩露幽儀

上之二句夫婦正人而謂靜樂下之二句指平井氏死後之事也

和奇

あはれいと花ははらりに見てめまじ

根はゆるく花はまはるく春は

胡蝶をさへふなとりりみゆれ

評

平井氏の父は道はすく學藝して心術不憂万古不易の同志より久まがかりるるにふはれ

かゝるんが正して女あり越えれ中老と勤く没

にうまが平井氏の為不皆善なりと朋友皆稱美

す予難及の行一をすまより大守の命として掃

別大坂にあり一時又命にらるく伏見れ川舟

にのりるる船吹入る大守れ扶持くよりあやま

てみはく山のくは平井氏もふふ一をかと帯刀

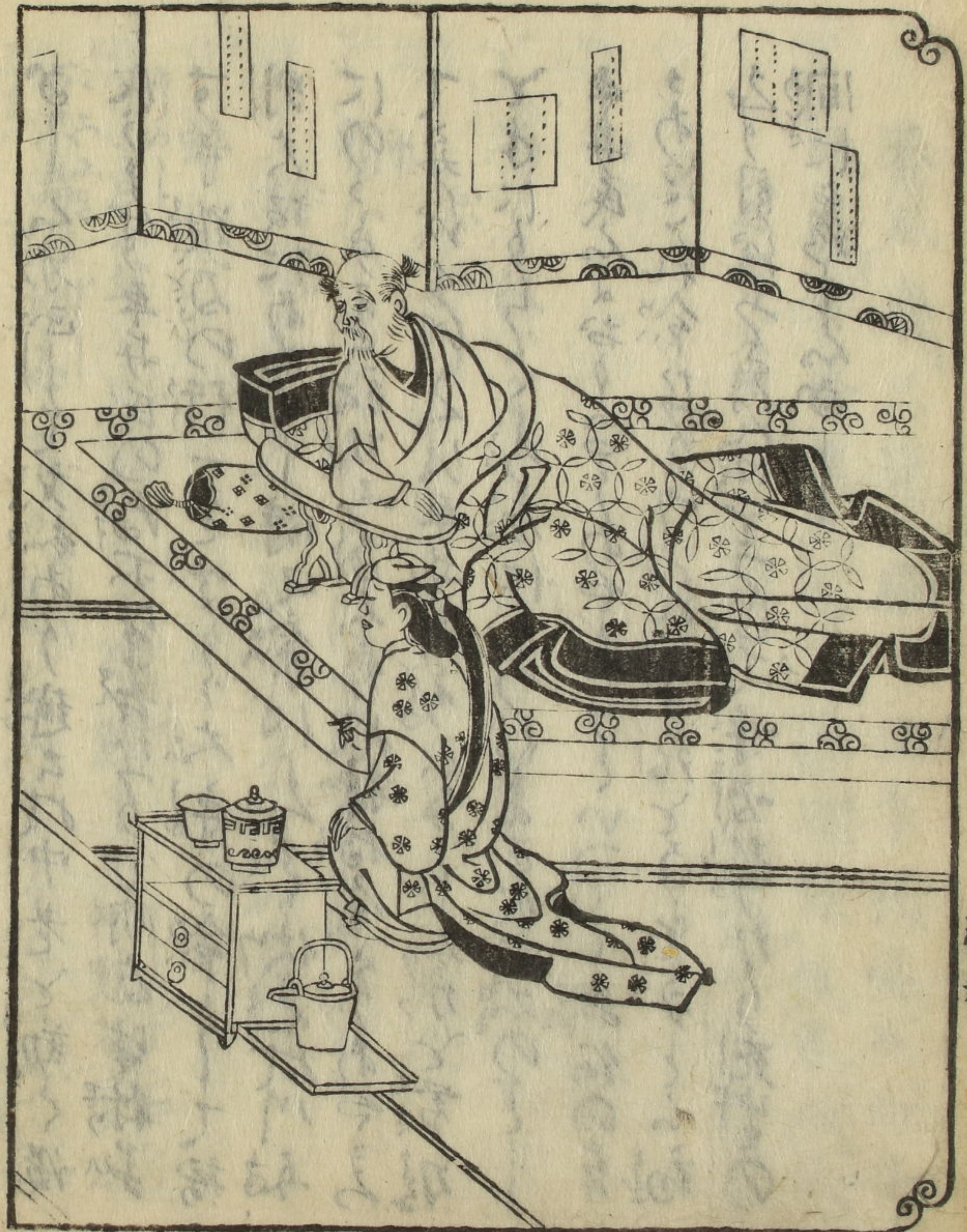
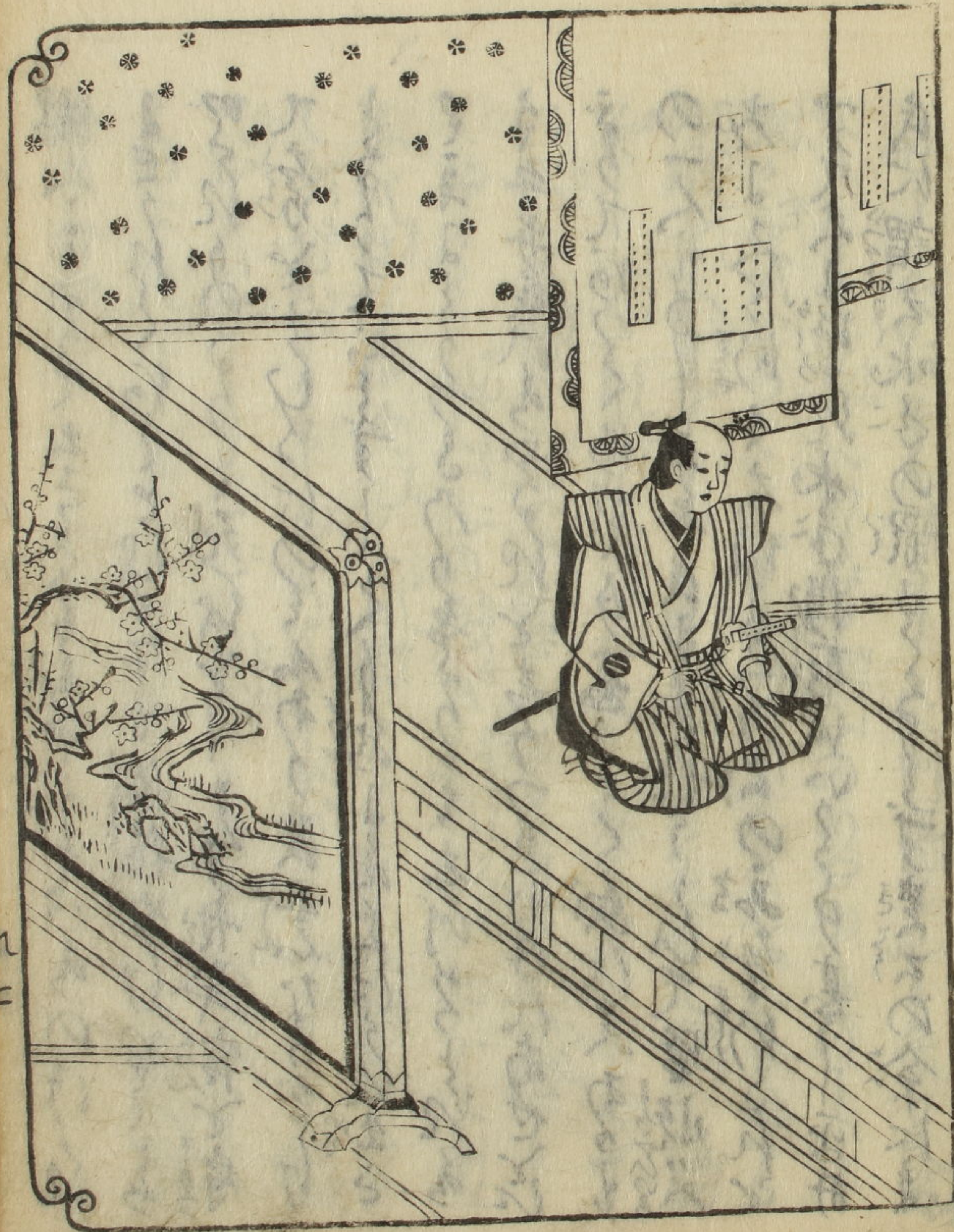
とにりりくく座にまらむまさに大石のどし

平井氏もよおりのあやまらといへども我何のそ

らあつこれ命なりや死なる死とるやとんと初

づ目成やうははついで呼吸静なり死生もの

間にあつらんあ





後人よりして云々も中々そのははれ  
よせうねく何とぞむきども 掘掛ゆけりぞとち  
ぢりれりのりと死にと一まぎ 唯武官と守  
てたかどとむらにのこみあり其むなるがけ  
とちりてちさず一くり 唯よまるとにられ出と  
又よよとつとつりきりきりきりきり  
と平井氏れもつりきりきりきりきり  
きりてつりきりきりきりきりきり  
の一人もつりきりきりきりきり  
ぢりよとつりきりきりきりきり  
すてたよとつりきりきりきりきり  
氏に謂云水子の罪はくまらふすまの命にま

つせくんのやまんとつりきりきり  
て云く子の罪にわらず 赤子のわやまらのどと  
掘掛ゆけりきりきりきりきり  
の罪事もつりきりきりきりきり  
英一令一斤お水は五人はあつとつり  
に沈て不動うんで不怒大坂よりて 養おれ  
て怡くつりきりきりきりきりきり  
甚風林す始流して自蒸うりきり  
て勇氣存り予是れはく 兼後さす予事にあ  
ておひし出予が己の支用と云 又善行か  
くのどれとくたさるま婦といふ一又大人若  
きつりきり

平井氏の不潔とゆへ人より病死せざるも未だ病あり  
一これ予一日けく遊る平井氏云は東不忠流は妻と  
見らる事なく予に茶方とわさるる美子湯は人より  
分と入附ふ二分と加へ取はさく羽はく妻をて嘗  
人とあはれ予曰えより不食して薬を毎日後男す  
故よ妻のく予欲録しく云は是まことに奇なり云  
正人よりゆへに思ひいら世人同思難く宴會は社友  
しはあはれとて徳持といへん予が母方れ祖父ハ矢部氏  
と云矢部の妻ハ正人よりと先出で早世す年公終て  
鯉より女子多し祖父も正人の者なれば母なれば  
おしひまの肩大切りてお寝くはれハ納戸はれお  
にゆるい入寝せくはれれお口に祖父伏せり武取予

が祖母枕上よま存せのゆありくと云く父とて  
若く云今既に火難出まらりゆへとく寝りゆへ  
祖父髪冠起て見れば人よりおまづは次れ間見え  
きわわりのりさるるもくはれは床よたそし  
さる新しれ捨のまれりさる小純懺いさして火やつ  
さるんぞらんには人よりおまづはつきて意よとて  
ちおしちひ志がまらておまは妻ハ正人なり祖父  
もく正人の不潔なりといひりとれより妻に  
らずけ火ひらりたらまらば女子の寝おハ一方に  
いしてにげおぼさるる一皆やけ死せん事ハら  
ふゆなりとて被稱し翌日一日れ繫糸して妻が  
袂にひまのたて父予にさるり今平井氏の妻も

新妻にわづらひて其礼業と根柢ありて去るる  
べしと云ふ事なりとて不用ハ大高危と云ん  
平井氏笑云夫れ祖父母ハ正人なれば奇蹟あり予ハ  
不徳あり何の不徳ありんけ礼業と毎日に用ひ故  
に親見たりと予云福渡と付不位あり妻を今縁  
結時にあはれ予が世を去るも吾子篤実にて内  
不徳なりと一妻友とせば自欺はわづらひて去る近  
年虚弱なりといふは予の病なりは髪礼業にあら  
びとて病とが予の病なり予不辭なりといふが  
髪を正人なるは故に髪を去り何が他人よ  
いふや髪は同志より謙退し終るべしといふは  
びく再三とてむきも其は不用と見たり果して

大高とゆて死を病中予けて安否公同に固ま痛  
むの病ありて予独ありて伏しおがらいつり  
髪は同妻の解令一悔にわたり今にきて親て  
せんか一髪又余なりと予涙とてて涙さ  
礼業と病なりはにりらひりくは夫とまらり色を  
けりゆもあはれ一髪りむく人よわらひりなれん  
と髪篤実よとて予は不徳なり何ぞ礼業ありん  
とわらひりさるるべし是とわたりは篤実にてさかしま  
密にり聖人の中なるは予が不徳はまこと為情あり  
髪を去りて一髪礼業あり一髪はまこと為情あり  
とて予はんとおひりて予も甲斐の髪を去るは  
とて予はんとおひりて予も甲斐の髪を去るは

悲歎神女めりせりなり

彼慈母の如くに記せしとこれ妻の母にまゝに天竺  
の如くふる老老乃舅につくて孝道とほくし妻乃  
誇ると怒らざりてくるはず世一己の如くはく  
女が女工おこころずも嘆く起終啼て伏すまよとら  
いまごころわく徳道は守つてく髪と切江白粉を  
とく歯とろろず慈母ろく称されば略といひく  
再歎称せりなり

賛

舅既年耆老

宗子亦傲謾

嫂嬪良益勞

神此女憐

和歎

りけりわぬ先とつらむねを

いづくもむとありれとぞたり

かのみまうき娘にとくをねく飛松の

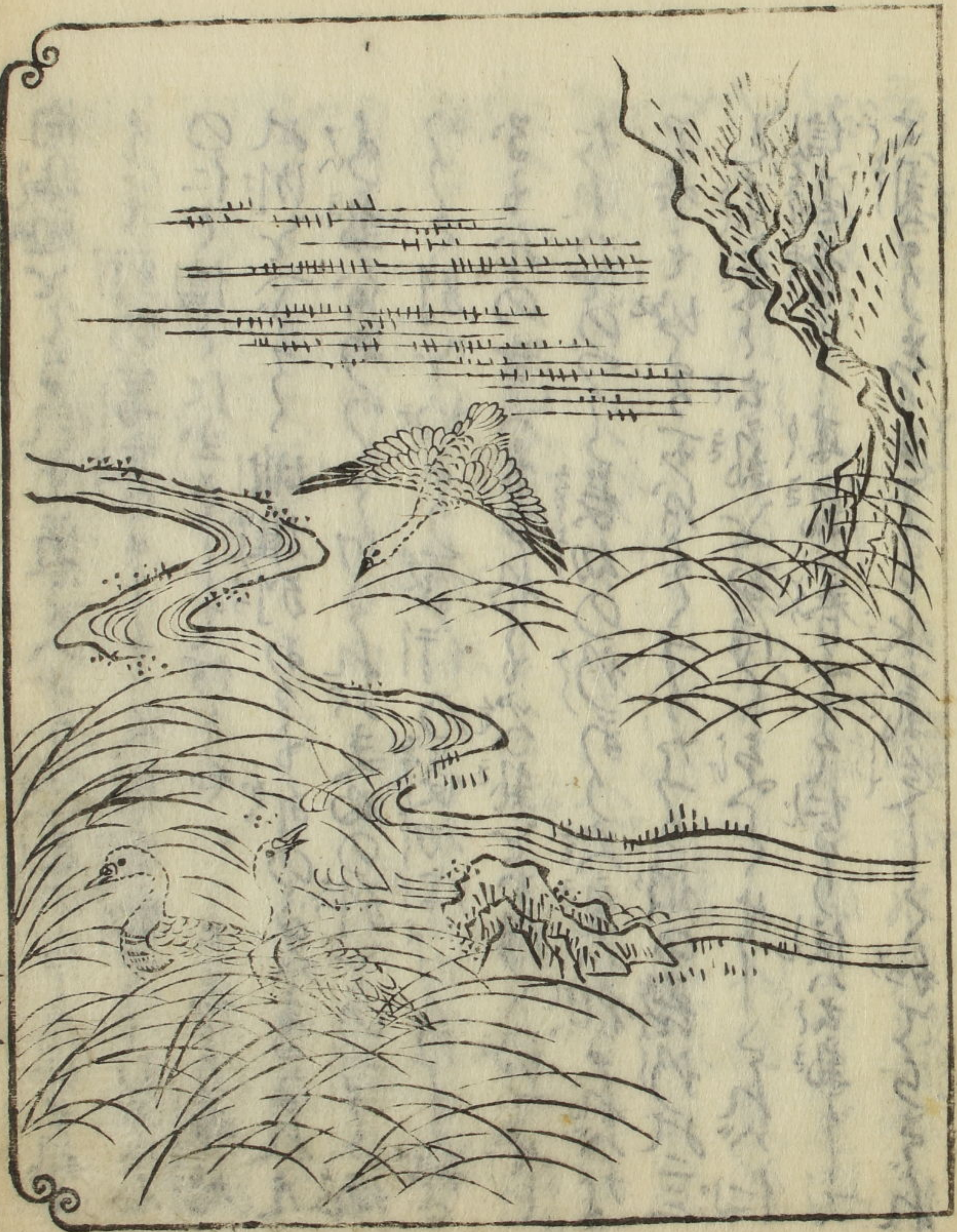
ちくせれりんとむりりありん

評

善ふる吾女も行啓れ女のおうむととるり  
故よ御告志皆慈孝と称せし婦人な成初ると云  
ども平が口よりいわたりてこれ更何ら後人  
まゝと稱すべし列女のなげと行する又列  
女はなむべしとるもども列女なりもそがれ  
らるるあり予しくよけのり終せ賢と初を  
にけ判とるして吾女と稱と

論

或同此婦人の慈存とんればまことに貞女の行なり  
 慈母が加えに道は安んずる文と不學といへども教  
 とあまじしれらるる不學なり婦人の行はあ  
 り子其日事父母能竭其力事君能致其身雖  
 自來學吾必謂之學矣とあるらば婦人もそまひ  
 にあつてや何ぞ貞と稱せざるや慈母れ嘉言に又  
 せうとけしやどし妻はさうらうに母はさうら  
 婦人といふまじきとあるらばこれを通にあつて  
 やむとわ行なり心志乃くこれらの男子に  
 してハ君子といへる婦人にしてハ貞女とい  
 ひざる唯一の行なり若稱するの



向極廻とくまれば道よへざる心志のくまれば  
もつち行の篤実よしして人は感動せしむらん  
の仁し信とに出でし何ぞや 云ふより睡鳩  
れ例とてさう 唯推別ありも弁のよみもされ  
あふふあつてさういふればまぬの例とのづら  
りて別とてさう 行乃長幼序ありて  
かも弁の事もあるれども大氣とわゆるはてせじ  
たればとのづら 長幼の例あり大氣ハ祀さればな  
り各とてさう 西のくすなり彼の器は三  
と本氣と大氣とわゆるさういふは仁  
信甚厚し一木氣ハ春ふして仁なり信ハ大氣  
と別なりさういふも水氣とて仁なり信ハ大氣  
と別なりさういふも水氣とて仁なり信ハ大氣

を心志くす一教とすて入也故よおれぬ凡女なり判  
別に教ありて幼がより長成と取らるれば道  
とのまはば念し一祀をえてさういふは  
づれよわさういふも其令祈は仁よ又序はあり  
学校とてりて八歳より小学に入成童よしして大  
に入人ハ天地の靈物よしして五行の令くけて純  
粹なりといふも其令祈は仁よ又序はあり  
わりの過不及なりさういふは故に幼童より成人  
のりて小学大童にさういふを学ばせられ  
はも序ありさういふはのさういふは我はさういふは  
くるさういふは推むるさういふは換はさういふは  
是てりて善の星とさういふは仁よいふは令

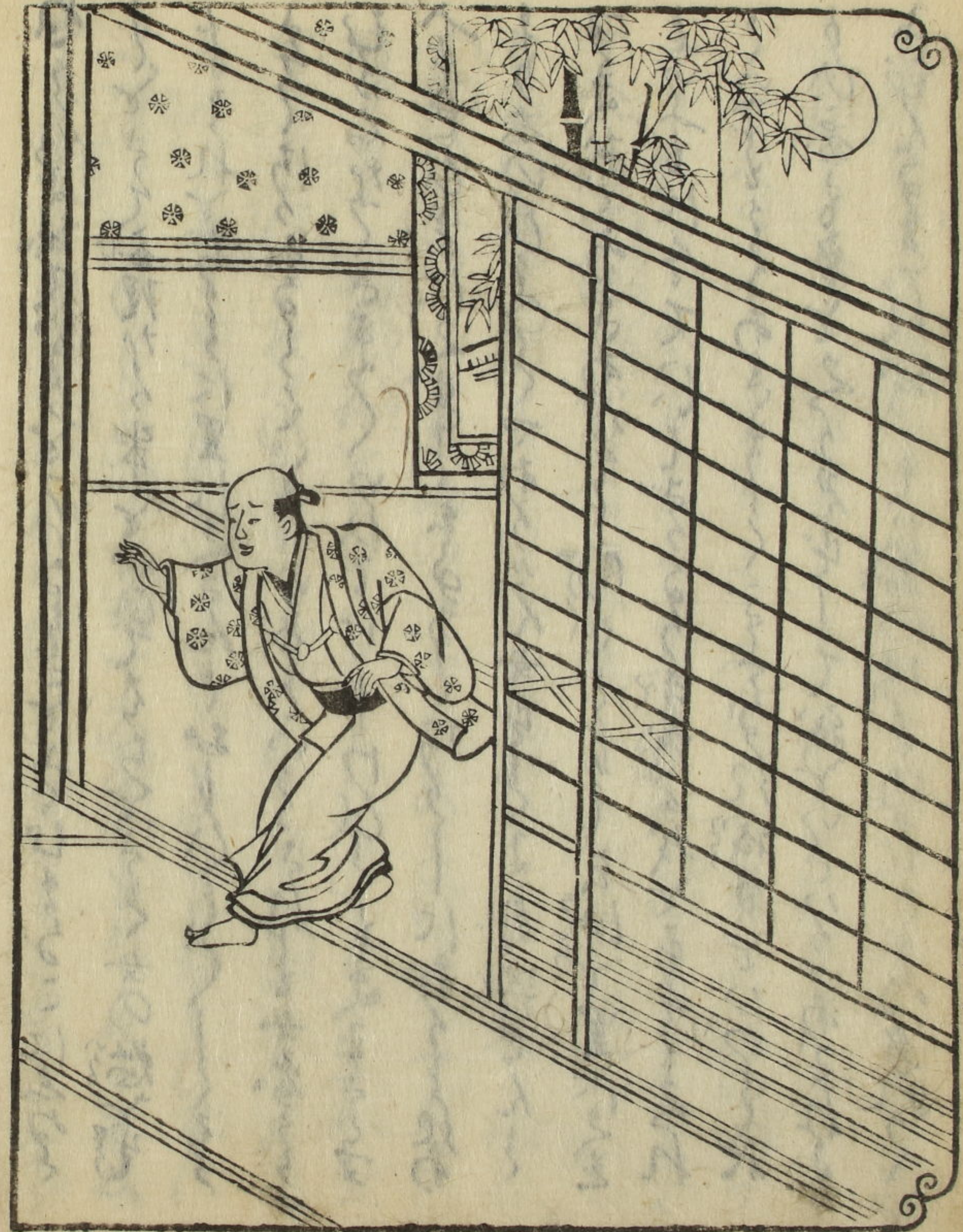
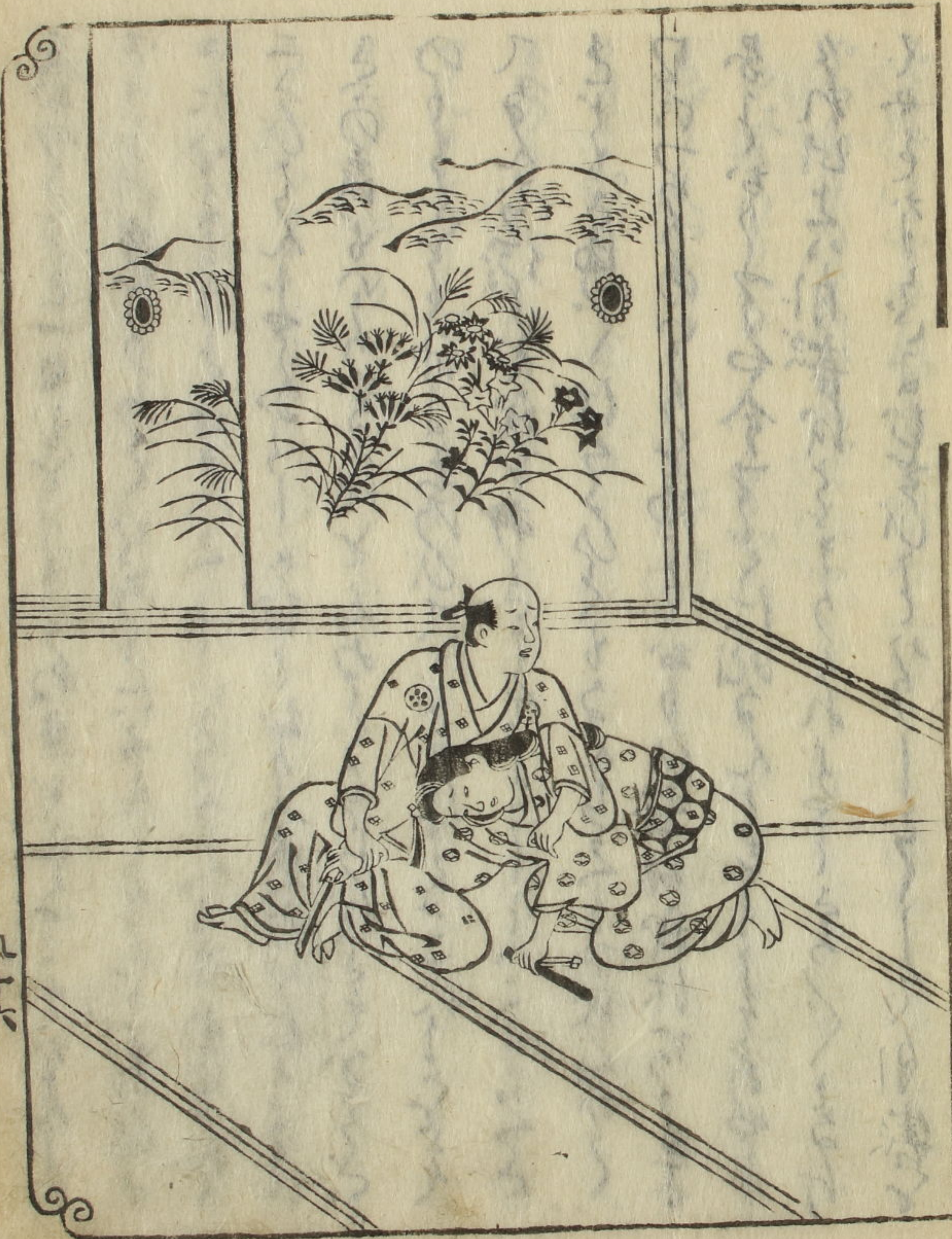
同もゆえにふえざるありて人ハ彼善人のどり  
彼ハゆえにふりくくあり我ハゆえにあらわ  
ゆとして吾にすまざる悪なる人として自  
欺まふ心術はよわくや 云ん情ハ心覺く  
く躬行心術はゆきゆきと心と心覺るべし心  
の明ハいままざる者物欲も忠臣義士孝子貞女  
のゆえにその感涙とが不義なるふたれゆと  
ましく甚しくびまきまき分れ心てらぶらよハあ  
らす或はさぬふく不徳の義倫とす其  
をえくハけ行のむてあらず彼善人我ハふる  
とゆに事あるべきゆえにその善と推してゆき  
ふと求つとらバ善善にもゆ道に入へ 何の自欺も

つわん善道とすても入ど善徳とすても自欺  
ハ自棄なり自暴自棄ハ天地に入られどとい  
備よとらば日ハ日とくゆきゆき  
一 此の友人同志の物語とす武陽江都の市店を  
と云賣人者有也中よりと云馬ハ十七八は素  
金に嫁娶して既云云十よわらふと云云のわ  
まいたる一とらん瘡毒とやいざしておりのゆ  
ゆに床よの起外より毒瘡病なり甚は切  
衣袋飲食茶葉費もとらとらとらとらとらとら  
二三歳の児女たりとらとらと世にけ瘡と楊梅瘡と  
付て瘡病とらとらとらとらとらとらとらとらとら  
てわくまきけとらとらとらとらとらとらとらとらとら

あはれなる地獄ありのいばなかとほどのういかたお  
まひりあるにけ女あふまるとせびまづらうと  
とりくくせりとくろくくく女とりとてんのから  
ぢろぢたくおらとらなるなで病あはれとすまよ  
十余の中はまおりのやまのいざといとくんとあ  
ま女の年もけりよつーふ幸よしそ我は嫁い  
ちせいたのりまぬのちぢり世とのよくよつこ  
何なるく我無病とけけりけり我ひりけり  
せころるびるればけしにけくくともかみけり  
らーく女よとけりけりとんとんとあひり  
くまといびくいていざあはれとあはれ  
キとまよけりけりけりけりけりけり

ねとけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
ととてけりけりけりけりけりけりけりけり  
ドそれとけりけりけりけりけりけりけり  
とけりけりけりけりけりけりけりけり  
ひらんとけりけりけりけりけりけりけり  
へせひ里にけりけりけりけりけりけり  
まり志のびくくやあうらん女とてくよ  
すまおとらあつてけりけりけりけりけり  
とくもにらていざとらるるけりけりけり  
といざとらあつてけりけりけりけりけり  
りひあもあつてけりけりけりけりけり  
ふぢんとあつてけりけりけりけりけり







さうさうとせんなくくさとしにうりーとさし

賛

本分未止人性善 高女守義自然綯

好色充満店市間 獨養病夫若不倦

和歌

じう一掃く美妙とみぐちうけゆん

あはれはあましくあざひにさく

つらさぬ縁はえうくハあうたんに

さむじうさだのらくともうん

評

所田舎の人々市所の男女ハうろく又うろく

つらひやうし一男ハ或ハ二人の妻とさうりら

或ハ何れもさうし新枕交柄け高婦操ありて

花まびたりの其心勤うらにあらずんば吾美ハ

然らるに出りま初急氣を吐き出さうと

しとどとす玉の列女たり

ふ新なるか名徳武蔵の家は生れくる

と密バ貞女の名とぬぐ

